カトリック高松教区報

2008年3月9日（第122号）
発行所 カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074 高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659 FAX 087-833-1484
Email
教区:tkcuria@mxi.netwave.or.jp
広報:tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成:yosei@takamatsu.catholic.ne.jp
http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

アド・リミナ ～ローマ訪問～

高松教区長　溝部　脩

昨年一二月一〇日より一五日まで日本司教全員によるローマ教皇庁訪問が行われました。世界の司教は五年毎にバチカンを訪れ、教皇様への表敬訪問と各教区の報告をすることが義務づけられています。今回は種々の理由で時期が遅れましたが、無事全ての日程を終えることができました。私はできる限り多くの聖省と評議会を訪問することを心がけました。実に九つの省庁と評議会を訪問し、夫々の長官と対談することができました。ローマとのつながりが何であるかをよく分かることができた訪問でした。特に印象深かったのは福音宣教省と典礼秘跡省であり、高松教区の問題も含めて日本教会全体の問題を討議することができました。また、私にとっては今年行われる列福式のこともあり、それに関しての会談もあってかなり追われたローマ訪問でした。しかし、なんと言っても最大の喜びは、新しい教皇様と初めて会えたことです。じっと耳を傾けて聞いて下さる教皇という印象が強く残っています。この点で倣うことがたくさんありました。

今回全ての長官級の枢機卿、または司教から言われたことは、共通して普遍教会と地方教会とのかかわりということでした。普遍教会は世界を見た上で教会の方向性を打ち出す役割があります。それを地方で、地方の事情に合わせて活かしていく役割が地方教会のあり方だということです。そのためには普遍教会の打ち出す指針をよく理解すると同時に、地方教会に適応していく努力が絶えず求められるということになります。時々そのことのために普遍教会と地方教会の意見の食い違いがあり、まさつが起こりえます。だからこそ、両方の教会が対話を続ける必要があります。地方教会を統治する司教として、身につまされる話が多くされました。

教皇様と（教皇書斎にて）

どちらにしても大切な課題であることは確かです。高松教区は協力宣教司牧を、教区の方針として打ち出しています。このことについても、ローマでは好意的に受け入れられました。今年はこの点でもう一歩前進することと致しましょう。

主な記事

2～3面　委員会報告
4～7面　地区だより
4面　神学生だより
5面　医療のともしび
8面　WYD募集
お知らせコーナー

はばたき

主のご復活をまもなく迎えるに当たり、今、なすべき準備について考えてみたいと思います。▼「主なる神が地と天を造られた時、地にはまだ野の木もなく、また野の草もはえていなかった。主なる神が地に雨を降らせず、また土を耕す人もなかったからである。しかし地から泉がわきあがって地の全面を潤していた。主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた。（創世記二・四～七）▼神は土くれで人の肉体を形作り、その後、そこに霊を注ぎ込むことで生命をお与えになりました。そうした人間の姿をされたイエス様の死を認めることが復活の大前提です。肉体である土は自然に還り、霊が生き続けるわけです。▼地表面が土のままの場合は、大雨が降っても雨水は土中に染み込み、ゆっくり下流へ送り出すことができます。流出量の調整機能以外に、浸透中の浄化機能や養分・水分の貯蔵機能も有しています。▼このように価値の高い身近な材料である土で身体を作られた意味について、今一度目を向けてみましょう。

委員会報告

（拡大）宣教司牧評議会報告
高松教区の一致を目指して

事務局長　西川康廣助祭

二〇〇八年一月一九～二〇日（土・日）、愛媛地区・道後教会において二〇〇七年度（拡大）宣教司牧評議会を開催した。教区宣教司牧評議会は、通常二ヶ月ごとに役員会を開いており、年に二回の全体会を開催している。二回の全体会の内一回は、諸委員会と諸活動団体を加えた会合であり、これを（拡大）宣教司牧評議会と言う。二〇〇六年春から高松教区は「協力宣教司牧態勢」へ移行した。（拡大）宣教司牧評議会は、諸委員会と諸活動団体が、協力宣教司牧の枠組みの中で、どのように協力関係を持ちながら活動できるかを、一緒に考える場となることを目的としている。

一日目は、二〇〇七年度「司祭評議会」・「宣教司牧評議会」が司教諮問機関として取り組んできた課題とプロセス報告に基づき、宣教司牧評議会の位置づけに関して審議した。更に二〇〇八年度の事業計画内容①ペトロ岐部と一八七殉教者列福式in長崎巡礼　②ワールドユースデイ（ＷＹＤ）のシドニー版と日本版in山中湖の準備段階と参加呼びかけ、また経済面を含めた地区・小教区の全面的協力を要請　③地区宣教司牧評議会規約と小教区宣教司牧評議会規約作成の確認　④ＮＩＣＥ後二〇年の振り返り　⑤教区経済の現状等について話し合った。一日目の終わりは愛媛地区、特に道後教会マリア会の協力により、暖かい鍋物と手作りの食事のもてなしに、参加者一同は和やかな親睦のひと時を謳歌できた。

二日目は道後教会の主日ミサに参加し、小教区の皆さんと一緒に神様を賛美し交わりのひと時を持つことができた。その後昼食までの間に各地区評議会、諸委員会、諸活動団体の活動報告や計画報告があり、最後に質疑応答、特に二〇〇七年一一月二一日に開催した高松教区「全司祭集会in池田」の報告をもって閉会した。

今回の（拡大）宣教司牧評議会を振り返って、時間的な都合もあったが、報告事項に多くの時間を費やし、審議することが少なかった反省点がある。次回からは報告をもっと簡素化し、活発に意見交換する評議会へ方向転換する努力が求められると感じた。

拡大宣教司牧評議会に出席して

桜町教会　鶴見典子

一月一九日正午に西川助祭の運転で桜町教会を出発、暦の上では「大寒」でしたが天候にも恵まれ、松山までの三時間が短く感じられました。

到着してまもなく松永神父様の開会の祈り、ファン・Ｍ・ゴンサロ神父様、溝部司教様の挨拶があり、その後西川助祭、愛媛地区評議員によるオリエンテーションが行われました。審議事項に移ったころから皆さんが活発に意見を交換しておられるのを見て、ここにいる私は場違いでないかと思ってしまいました。そして、夕の祈りの後は普段あまりお話をする機会のない方々と楽しく夕食をいただきました。

会議の様子

夕食後、高知の方々と一緒に司教様が青年の集いで松山に来た際に立ち寄るという「椿温泉」に行きました。源泉も良く建物もきれいで日頃の疲れが癒されました。

翌日はあいにくの雨でしたが、今泉さんが道後教会まで送って下さいました。朝食を終えた人から順番に教会に送って下さった今泉さんに感謝いたします。

主日ミサ後、審議継続、そして昼食、二時ごろ教会を後にしました。高速道路に入る前「川内～西条間雪のため通行止め」の表示が・・・。やむなく国道一一号線を通って帰ることになりました。桜三里のあたりでは二〇〇ｍを四〇分もかかり、松山～高松間の所要時間一四時間、乗り物が違えばヨーロッパまでも行ける時間でした。運転をして下さった河合さん本当にありがとうございました。お疲れ様！

今回、このような会議に参加させていただいて、異なった場所、立場から教会を中心に様々な活動を行っている方々の報告を聞くことが出来ました。

殉教者に倣い、信仰を生きる

生涯養成委員会　Srメリー・ギリス

一月から始まった講座「殉教者の霊性」は、現代の中で信仰を生きようとしている私たちにとって大きなチャレンジを与える話です。第一回目の話はヨハネ原主水についてでした。彼のように、世が価値とする名声と利益に憧れることもあれば、その空しさを感じることもあります。最後に、彼はイエスの十字架の意味を深く悟り、殉教者となりました。第二回目は、現在問題となっている「信教の自由と政教分離」と殉教者レオ税所（さいしょ）七右衛門についての話でした。昔の時代から、キリスト教の教えに従って生きることは、日本の国の風土の中では決して容易なことではありませんが、税所のように何よりも神様に従うことを優先する生き方を選ぶ恵みを、絶えず祈りたいと思いました。ちょうど四旬節を迎えているこの季節、回心の恵みを願う私たちに、殉教者の確信に満ちた信仰は大きな模範になります。三回目は三月八日です。奮ってご参加ください。

四月から列福式のある一一月まで、殉教者の生き方について、教区内外の講師の話を聞く計画を立案中です。できれば

月一回の周期で、教区の各地区で実施できるように計画したいと思っています。

小教区を通して、昨年九月一五日徳島で行われたシンポジウムの内容を文書化した冊子とシンポジウムの会計報告（七ページに掲載）を送りました。すでに皆様の目に触れていることでしょう。皆様方の寛大なご献金や多くの方々の惜しみないご寄付またご協力によって、大きな教区行事を実行することができました。心から御礼申し上げます。なお会計報告は教区報にも記載されています。

現在行っている講座～聖書、人生論、賛美の歌、イタリア語など～は、春からも継続するか新しく開講することを計画中です。次回の教区報では具体的にお知らせできることでしょう。「宣教」という教区目標を意識し、ご自分の参加だけではなく、イエス・キリストをまだ知らない方を、是非お一人でも多く誘ってくださいますようお願いいたします。

真理は人の心に伝わる！「若者と聖書」を行なって

佐藤直樹神父

一昨年の四月より、溝部司教様は教区内の宣教拡大、特に若者たちへの福音宣教を目的に「若者と聖書」と銘打ち、高松地区にて信者ではない幼稚園の先生方を中心に、聖書の学びの機会を提供されました。高松で始まったこの学びのひと時も、昨年の四月より高松・丸亀・高知中島町にて行なわれるようになり、一〇月からは道後、今年の一月からは坂出・鳴門にても実施させていただけるようになりました。地元司祭方の御理解と、地元信徒の方々からの温かな御支援と励ましにより、若者達が聖書に触れる機会が与えられるようになったことを、この誌上を借りて心より感謝申し上げたいと思います。

現在、各地区の平均参加者は以下の通りです。高松（一二名）・丸亀（六名）・坂出（四名）・高知（五名）・道後（六名）・鳴門（一五名）。対象は高校生から大学生・社会人青年と様々ですが、時には、若者たちに混じって年配の信者の方で参加されている人もいます。

ある聖書箇所を採り上げて、それについて講師がコメントや示唆を含んだ講話をし、その後、全員で「分かち合い」の場を持ちますが、彼らの分かち合いの言葉を聞く限り、参加する若者たちはしっかりと聖書から与えられるメッセージを理解しています。それは信者の若者も、信者ではない若者も・・・みんなです。やはり福音のもつ力、神のことばが人の心に語りかける真理は力強く、かつ普遍的であることを実感します。特に価値観が混沌とした現代社会の中で、将来に向けた人生の歩みをする若者たちにとって、神から与えられる真理のことばは、人としての生き方に大きな価値観を見出すことが出来るからです。

みことばの種を蒔き続け、その種がどのように成長するのかは分からなくても、からし種のように小さな神の国は自ずと、四国の若者たちの中で確実に木へと成長し、豊かな実を結んでいるのです。まさに神のことばの真理は人に伝わるのです！

中高生の集い　一緒に聖書を開いてみよう

松山教会　西宮園美（高二）

今回は学校の関係で最初から最後まで参加することができず、ミサにも不参加となってしまいましたが「一緒に聖書を開いてみよう！」というテーマのもと聖書を味わいました。私にとって聖書というのは自分の部屋にもある身近な存在です。しかしあまり読む機会がない遠い存在でもあります。同世代の友達といろいろな意見を交わしながら聖書を集中して読むというのはこのような集まりでしかできないことだと思います。

松山教会にて

今年は高校生だけでなく中学生も加わり、去年と違った雰囲気で楽しむことができました。三月に岡山で行われた中国ブロックカトリック高校生大会での友達、四月に高知で行われた子どもの集いでの友達など久しぶりに会う友達だけでなく、新しい友達もできました。なぜかこのような集いで出会う友達は初対面でも本音で話し合うことができます（神様のおかげですかね？？）。この楽しさ・良さは参加してみないとわからないものです。もっとたくさんの高校生に参加してもらえたらなと思います。

今回この集いを準備してくださった神父様・ブラザー・シスター・青年部のリーダーの方々、松山教会婦人部の方をはじめとする信者の方々皆さんに感謝したいと思います。ありがとうございました。

高松教区報一二一号（一月一日号）に寄せられた今治教会の新年の抱負が、手違いにより掲載できなかったことをお詫び致します。今号に掲載します。

今治教会 新年の抱負

新春から「今治教会のホームページ」を開いて、宣教・司牧活動を広く地域社会にアピールするよう努める。そして、地域に開かれた教会を目指します。一八八殉教者列福式にこぞって参加し、共に喜びを分かちあいたいと思います。

地区だより

春一番の嬉しい便り
「NAGASAKI 1945 アンゼラスの鐘」

上映実行委員会事務局
郡中教会　今泉洋子

新しい年を迎えた一月中旬、伊予市教育委員会教育長から嬉しいお便りを頂きました。

それは、昨年松山地区三教会（松山・道後・郡中）主催で行った「NAGASAKI1945アンゼラスの鐘」上映会で得られた収益の一部を、伊予市の子供達へ平和に関する本を買っていただきたいと寄付いたしましたことに対する御礼の手紙でした。「数多くの平和に関する図書等を購入することができ、伊予市立図書館で広く市民の方々に読んでいただいております。」という文面に、購入した図書の写真も添えてくださっていました。

平和を願って、みんなで汗を流した「NAGASAKI1945アンゼラスの鐘」上映会が、一発の花火の打ち上げに終わったのではなく、このような形で「平和を願う心」を残させてくださったことに感謝せずにはおられません。

伊予市が購入した図書

養成コースを終えて

江ノ口教会　宮本匡士

高知協力宣教地区（中島町、江ノ口教会）は、二〇〇六年六月より毎第三日曜日に交互に教会を会場とし、福音宣教推進全国会議の確認のため「本当の教会であるため、何が必要か」「現実の私（教会）」「固有の召命」「マザーテレサの場合」のテーマで分かちあいをする。

なかなか具体的な小教区の姿が現れてこない。建前論になる。二つの小教区の出会いが発展しない。ミサ後に、別の教会に移動するのが大変だ（車に乗り合わせるとしても）。半年間中断して、両教会の研修委員と司祭はともに思案した。

高松教区に就任まもない溝部司教の二〇〇五年五月一五日の中島町教会での「聖霊降臨祭説教」を原点としよう。作業を取り入れ、心を開きやすくしよう。合同ミサ（当日は会場の教会でのみミサ）を各評議会に提案しよう。新たに出発。

二〇〇七年七月より、「どんな教会共同体になるのか」でグループ作業が開始する。「のほほん」「人任せ」「指示待ち」な小教区の実態が書かれた紙片がたくさんあふれた。自分の言葉で目標を、福音を発言することが大切だと感じた。

五回経て、二〇〇八年一月やっと目標を言葉化できる。私達（高知地区）教会共同体のめざす教会像は『開かれた教会』。この目標を実現するために、参加者一同は『一人ひとりが心を開き、その出会いを大切にし、喜びを創り、分かちあう教会』『社会と共に歩み、奉仕する教会』の二つを模造紙上に掲げた。

神学生だより（1）

東京カトリック神学院　哲学科１年　松田栄作

今号から，神学校の様子をお伝えすることになりました。神学校で何を学び，何を行っているのか，またどんな様子なのか，できるだけお伝えして行ければと思います。

早いもので入学からもう１年が過ぎようとしています。今は１年間の総まとめの時期です。神の招きに対する自由な応答としての自己奉献の固い決断がついているのか，心の中を見極め，目指す司祭像と今後の自分の課題を明確にしなければなりません。

１年間，聖書や司祭養成に関する教皇書簡，公会議公文書，典礼と祈り，霊性やカテキズムなどを学びました。密な共同生活によって自分を見つめてきました。さらに障害者施設や老人ホームでの体験学習，黙想，集中講義なども充実したものばかりでした。

授業からは，現代世界のどこに神様が働いておられるのか，時のしるしを読み取り，福音に照らして社会を福音化していくために，信仰や教会のセンス，宣教のセンスを磨いて行くことが重要であると分かりました。

共同生活からは，人々とよく交わり，愛である神と人との架け橋となるよう人間的個性を磨き，また人々の中にイエスを探し求める精神を持つことが重要であることを学びました。アサーション（相互に尊重する中で自己表現すること）を心掛けています。

祈りと典礼の生活からは，キリストの祈りである教会の祈りをゆがめることなく感じながら祈ることによって，主イエスとの友情を育み，ありのままの自分を捧げ，内省や糾明よりは，神様の積極的な働きかけを日常の中に感じるように努めることによって，神様の働きが見え信仰を育むことができると分かりました。

余暇活動も重要です。自分と向き合えない者は人とも向き合えない，余暇を持て余すのは自分が分かっていないということ，と言われています。休養が必要なら休養し，気分転換が必要なら自然，動物と触れ合ったり，温泉に行ったりしました。意欲旺盛な時にはスポーツや知的な活動もしました。

神様の御手の中で自分が変えられて行っていると感じています。高松教区の宣教のために神様のよき道具となることができるよう成長して行きたいです。お祈りくだされば幸いです。

上勝町から国を良くしてゆく
地方にこそ健全な精神が

阿南教会　渡部厚子

私の住む上勝町は人口約二千人、いわゆる限界集落で出来あがったような町です。

昨年の一二月、私は町会議員選挙に初当選しました。移住者としては初、女性としては四〇年振りの議員です。

さて、日本は農業、林業をアウトソーシングして都会だけで栄えてゆくつもりのようです。地方は切り捨てられ、末端から死につつあります。

四肢が死んでも胴体は生き延びられるのでしょうか？けれども顧みられない山村の風景は美しい、生きて行くために刻んだ棚田や段々畑は美しい。昔の人のたくましい指の跡が、積まれた石のひとつひとつに残っています。人間が生活することによって風景がもっと美しくなるような、そういう生き方が本来あるべき姿ではないでしょうか。

地方にこそ国を引っぱってゆく健全な精神が残っています。

長年培ってきた田舎の人々の知恵と技術をフルに活用して、上勝町から国を良くしてゆく、これが私の決意です。

聖歌をうたって　こころを一つに

中島町教会　中澤晋二

私は、長らく教会で聖歌のギター伴奏の奉仕をしてきました。典礼聖歌集をはじめ、テゼの歌や数々のゴスペルソングを弾き歌うなかで、私が感得したことを手短に申し上げます。

聖歌はいつでもどこでも気軽に口ずさむことができますが、何よりもミサで歌われてこそ大きな意味を持つものと思われます。言うまでもなく、ミサは信徒が一堂に会して祈りを捧げる祭儀であり、聖歌は皆のこころを一つに束ね、高めるために無くてはならないものなのです。聖歌を歌う心得は、何よりも「祈りのこころ」を込めるということでしょう。つまり、聖歌とは「祈り」を盛り込むための「器」のようなものであり、私たちはメロディとリズムを通して、深く「御ことば」を味わい、肉体化するのです。

ところで、昨今はインターネット上で信者どうしがグレゴリオ派、フォーク派などに分かれて侃々諤々（かんかんがくがく）己の信ずる聖歌の正当性を主張しあっているのを目にしますが、音楽というものの性質上ひとの好みは十人十色であり、感覚的な好悪をめぐっていくら論争しても詮無いこと、と私は思います。それがどんなジャンルであれ、良い聖歌とは、言葉とメロディが渾然一体となって心底から祈ることができ、こころいっぱい神様を讃美することができる歌、といえましょう。この観点さえ外さなければ、静謐（せいひつ）なグレゴリオ聖歌であれ、パンチの利いたゴスペルソングであれ、あるいは文語調もゆかしいカトリック聖歌であれ、一つのスタイルに偏ることなく、自分たちの教会の歌として選び取ってゆけばいいでしょう。

個人的に、聖歌の理想像を申し上げますと、まず何よりも言葉とメロディともに簡単明瞭であることを挙げましょう。ミサは、信徒のこころを祈りによって一つにする儀式ですから、なるべく唱和しやすい旋律であること、そして「御ことば」のメッセージがまっすぐこころに入ってくる歌詞であることが望ましいと思います。

「あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない」とイエスがおっしゃったとおり、祈りの的を絞って、「御ことば」をこころに刻印するような聖歌を歌ってこそ、私たち信徒の一致が実現されるのではないでしょうか。聖歌にはそれほどの力があると信じて、私は弾き、歌いつづけます。

医療のともしび（8）
～全人医療について～

全人医療という言葉を聞かれた事があると思います。私がこの言葉に初めて接したのは卒後研修を受けた淀川キリスト教病院でした。当時医学部で受けた講義とは、全く違う視点からの患者さんへのアプローチでした。すなわち、大学では、疾病や病態から医学を学んだわけですが、各患者さんの全人格からアプローチするのが、全人医療です。

医療機関に来られる患者さんは、様々な悩みや痛みを抱えて来院されます。すなわち、身体的痛み、精神的痛み、社会経済的な痛み、そして、人間の存在そのものの根源的（霊的）な痛みです。そのすべての悩みや痛みに答えるのが、全人医療です。

その典型が、癌末期のホスピスケアでした。ちょうど私が研修した時代は、淀川キリスト教病院が新館建築の計画中で、柏木先生のご努力により西日本で初めてのホスピスが昭和５９年にできるのですが、その準備のために各病棟でコメディカル（医師以外の医療関係者のこと）を含めたカンファレンスが行なわれていました。各科の医師、ナース、ソーシャルワーカー、薬剤師、栄養士等患者さんに関わる全てのスタッフと時には、家族も交えて痛みのコントロールや精神的ケアや経済的問題や、患者さんの宗教的問題まで含めてターミナルケアのカンファレンスを行なっていました。

医療提供者と患者さんとの間にギャップがあるといわれる時代ですが、両者が全人的に関われるような信頼関係が作られるための環境整備がなにより必要と思われます。

医療法人社団聖心会阪本病院　院長　阪本一樹

各地区からクリスマスのたより

私たちは神の民

徳島教会　高田芙美

私たち神の民はどこへ向かって進んでいるのでしょうか。私たちは小教区の壁を越え、地区の壁を越えて、教区民として歩んで行きたいと望んでいます。

溝部司教様がこの教区にはこれしかないと打ち出された協力宣教司牧態勢のもと司祭、修道者、信徒が協力して神の国をつくりあげていきたいと望んでいます。

どうすればそれが実現できるのか、信徒として何が出来るのか、ほとんど絶望しつつ、しかも忍耐してあきらめずに思い悩んできました。

どうかこれから私たち神の民が教区民として同じ心、同じ思いでしっかり団結して歩んでいけるよう願ってやみません。

喜びは魂を捕らえる網です
クリスマス国際交流ミサに参加して

中島町教会　松本宏子

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について感謝しなさい。これがキリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。（一テサロニケ　五章一六節～一八節）

二〇〇七年一二月二四日中島町教会におけるクリスマス・イヴ国際交流ミサの中で、私はたくさんの笑顔に出会いました。このミサはたくさんの人の協力で行われました。

この一二月は私にとっては大変な月でした。脳梗塞で入院中の父のこと、長兄が六日に肺ガンの為に帰天し、その葬儀など、ここまで大変なことが重なると笑うしかないというような状態でしたが、私の為に毎日心から祈ってくださる人がいてくれたので大変な中にも神さまの恵みを感じていました。

私はその祈りに支えられて、典礼委員会から当日の司会として参加できました。二ヶ月以上前からブラッドリー神父様と国際交流委員会と典礼委員会で何度も話し合って歌や言葉を練り直したり、準備もリハーサルも当日も忙しくて、ミサが終わったとき、正直「ああ終わって良かった」とホッとしました。でも、なぜかうれしくて英語の司会のジーンやティナと自然に抱き合っていました。スペイン語での共同祈願を緊張の中で初めてしたパトリシアは、二人の子供さんがミサに参加してくれてうれしそうでした。いつも娘さんの送り迎えをしていた細川さんも、クリスマスのミサに参加して「こんなミサならまたぜひ参加したい。」と大きな笑顔で帰られました。青年会のみすずさんも、リハーサルでは苦労していた手話を残る一日で何度も練習して緊張の中にもやり遂げた笑顔がありました。このようにこのミサを通してたくさんの笑顔に出会えました。

そして、私はこのミサを通して、何か今までにはないエネルギーや喜び、人との連帯感のようなものを感じました。それは何だろうかと考えてみました。

私の気づきは、多様性を受け入れる事、信じること、あきらめない祈りから喜びが生まれるのではないかということです。たくさんの人の協力、その中には日本人、フィリピン人、ペルー人、スリランカ人など、そして若者、子供、中高年、信徒、未洗者、修道者、等々様々な人がいました。真面目な人、おおらかな人、自信のある人、ない人と、一人一人がちがうのです。違うからこそ素晴らしいのです。

私たちの人生は、駆け足で過ぎ去ります。素晴らしい出会いもあれば、別れもあります。今共にいる。今関わり合える。この今を大切にしないで、過去も未来も大切にできません。理想は山よりも高くありますが、私たちは、今自分に出来ることを見つけだして、互いに支え合い、励まし合いながら一歩一歩と進むことがやっとの状態です。

マザーテレサは言っています。

「私たちは喜びをもって、人間のみじめさの内に隠れておられるキリストに出会わなければなりません。喜びは愛だからです。喜びは祈り、喜びは力です。喜びは魂を捕らえる網です。神は喜びをもって与える人を愛されます。喜びをもって与える人は、より多くを与えます。神と周りの人への感謝を表す最も良い方法は、喜んですべてを受け入れることです。愛に燃える心は、自然に喜びにあふれます。」

最後にブラッドリー神父様に感謝したいと思います。いつも、典礼委員会、国際交流委員会などほとんどの話し合いに気長く参加されて、指示待ち信徒ではなく、私たちの自主性を促し、暖かくサポートをしてくださいました。新しい司祭のあり方を謙遜に忍耐強く示して下さったと思います。今、神父様の母国スリランカは民族紛争で大変危険な状態です。どうか一日も早くスリランカに平和な日々が訪れますように心を合わせてお祈りしたいと思います。

感謝のうちに

聖夜の灯火

坂出教会　小野雅之

去年の主の降誕祭である夜半のミサには、生憎と私は仕事のために出席できませんでした。それで翌日の日中のミサに出席し、ある信徒の方に昨夜のミサはどうだったのか、尋ねた際にお答えいただいた内容を纏めて、恥ずかしながら記述させてもらうことにします。

数日前から降誕祭のために、濱口秀昭神父様と役員の方々が準備されているのは知っておりました。ある用件で私が教会を訪れたとき、神父様と数人の役員の方が何やら細工をされておりました。実はそれが、エントランスに飾る蝋燭に細工を施していたのだそうです。

例年、通路の両脇に蝋燭を置き、夜半のミサが始まる頃には火を灯して神聖な祭りへと誘うような雰囲気を醸し出してくれていました。そして今回は、細工された蝋燭をランダムに飾ることにより、また一層幻想的で神秘的な聖なる夜に相応しい演出となったそうです。話していただいた信徒の方から最後に一言、「見れなくて、残念だったね。」

クリスマス・キャンドルサービス

徳島教会　ペトロ滝澤英一

徳島教会では、クリスマスミサの前に、一般の方向けにキャンドルサービスを持ちます。

教会の前で馬小屋の説明を聞く

キャンドルサービスには、徳島教会のベンチが満遍なく埋まるほど、多くの人が集まりました。テレビ局からの取材に応じてテレビに出演した際に、小川藍さん、松尾菜々さんがキャンドルサービスを上手にＰＲしてくれたのを見て集まった人もあったと思います。

聖書朗読は、中高生会の生田智敬さんにお願いしました。元気で明るい若々しい聖書朗読が聖堂に響いて、子供達の耳にも届いたようでした。聞いていて感動しました。馬小屋の説明は屋外で聞きます。寒空には少々長いようなので、今年は思い切って短くしました。原稿は当日直前に仕上がったのですが、白鳥夏菜子さんが上手に読みました。

ここに書き切れませんが、白鳥雄大さんを始め、設営・クッキー作り等、多くの教会のメンバーの協力がありました。有り難うございました。

クリスマスオラトリオを終えて

教会日曜学校リーダー　桜町教会　谷本千佳代

桜町教会日曜学校の子供たちによるクリスマスオラトリオが、一二月二三日（日）一三時より行われました。桜町教会では、クリスマスオラトリオをおとなと子供が一年毎に交代で行いますが、今年は子どもたちの番でした。一〇月二八日（日）に初顔合わせをして、それから毎日曜日のミサ後に練習をしました。一一月、一二月は学校行事も多くなり、欠席する子も多く、全員が揃わないままの練習となります。全員でできるのは、リハーサルと本番の二回のみでした。最初は、今年は無理かもしれないと、心ひそかに心配をしましたが、おとなの心配をよそに、子供たちはそれぞれ責任をもってその役割を果たし、見事に完成へと近づいてゆきました。自分のセリフをただ棒読みしていた子供たちが、その意味を理解するようになり、心を通わせるようになってゆきます。イエズスさまが、なぜお生まれになったのだろうか、私たちがどう答えてゆかなければならないか、そしてその喜びが子どもたちの心にも少しずつ響いていったのでしょう。衣装をつけて全員揃ったリハーサルでは、美しい降誕場面へとたどりつくことができました。クリスマスオラトリオの演劇を通して、クリスマスの喜びを体得した子どもたちの心から、今年のクリスマスの思い出はいつまでも消えることがないだろうと思います。観客の方から「静かに流れるような雰囲気で、とても感動しました。」とのお褒めの言葉をいただき、ホッと胸を撫で下ろしました。子供たちも、二ヶ月の長い練習から解放されて元気いっぱいの表情を見せてくれました。

イエス様を囲みオラトリオのフィナーレ

シンポジウム
足利将軍・阿波公方の末裔

殉教者ディオゴ結城了雪神父の生涯

（２００７年９月１５日）

決　算　報　告　書

（単位　　円）

【収　　入】

摘　　要		金額	備　　考
献　金		2,439,532	
（内訳）	各小教区	1,438,462	
	個　人	768,300	
	修道会	93,000	
	団　体	60,000	香川地区宣教司牧評議会 合同ﾌｧﾐﾘｰｷｬﾝﾌﾟ参加者
	会場献金	79,770	
収入合計		**2,439,532**	

【支　　出】

摘　　要		金額	備　　考
準備経費		183,300	
（内訳）	印刷費	174,750	献金袋・チラシ・ポスター
	通信費	8,550	チラシ・ポスター送料等
当日経費		1,945,505	
（内訳）	旅費交通費	1,174,590	講師・コーラス員
	謝　礼	633,333	講師・コーラス員
	会場費	70,790	会場費・看板
	会議費	66,792	茶菓・講師食事
資料作成経費		158,800	
（内訳）	印刷費	97,650	冊子作成
	手数料	35,700	テープ起し
	消耗品費	13,810	ＤＶＤ作成材料費
	送　料	11,640	資料送料
その他経費		67,412	
（内訳）	広報費	45,543	カトリック新聞・徳島新聞
	交通費	18,667	実行委員会
	支払手数料	3,202	振込手数料
支出合計		**2,355,017**	

差引残高　：2,439,532 － 2,355,017 ＝ 84,515　¥84,515－

（２００８年２月４日現在）

お知らせコーナー

ワールドユースデイ（WYD）シドニー大会

4月10日　募集締め切り迫る

北京五輪開催まで半年をきりましたが、ワールドユースディ開催は、もう4ヶ月後です！募集締め切りまでは、あと１ヶ月です！同じ信仰をもった世界の若者達との出会いは、皆さんの信仰と教会への意識を絶対に変えていきます。自分に与えられた信仰の喜びを、世界の若者たちとの出会いを通じて感じてみませんか？

大会期間：2008年7月13日（日）～22日（火）
募集締め切り：2008年4月１０日

参加申込書は各小教区にもありますが、申込書郵送希望者は、下記にご連絡ください。
なお、参加申込書も下記に郵送して下さってかまいません。

高松教区ＷＹＤ教区窓口
〒760-0074
香川県高松市桜町1-8-9
高松教区本部事務局
TEL　087-831-6659
FAX　087-833-1484
担当者　佐藤直樹

投稿記事募集

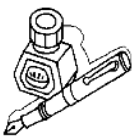
【テーマ】
テーマは、特に定めません。

【投稿要領】
字数は３００字以内（写真歓迎）
「所属教会名、住所、氏名」明記のこと。
中傷・誹謗はご遠慮下さい。
原稿はできるだけメールで送って下さい。
写真もデジカメで撮影したものはメールで送って下さい。

【投稿先】
メール：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
郵　便：〒760-0074
高松市桜町１丁目８－９
カトリック高松司教区広報担当
ＴＥＬ：087-831-6659
ＦＡＸ：087-833-1484

編集後記

今号より高松教区出身（徳島出身）の神学生松田栄作さんの「神学生だより」を連載します。神学生が何を学びどんな生活をしているのかを書いてくださいます。
神学校というあまり知られない学校のことですので、皆さんから「こんなことが知りたい」といった質問にもお答えいただこうと思いますので、ご質問を編集部までお寄せください。



主な司教日程

３月１日（土）～２日（日）
福山地区集会講演会
３日（月）～５日（水）
城山教会黙想会指導（長崎）
７日（金）　列聖、列福特別委員会
10日（月）　聖カタリナ大学卒業式
11日（火）～14日（金）
サレジオ神学院黙想会指導
16日（日）～23日（土）
聖週間
25日（火）　イエズス会霊性週間指導（四谷）
28日（金）　宣教司牧評議会
30日（日）　ＢＳ総会（松山）
４月７日（月）～10日（木）
東北巡礼
11日（金）　大阪管区研修会
14日（月）～15日（火）
横浜教区司祭研修会
16日（水）～19日（土）
ＦＡＢＣ総会（タイ）
21日（月）～25日（金）
九州３教区司祭黙想会
26日（土）　こどもの集い（徳島）
28日（月）～29日（火）
学校教育研修会
30日（水）　諸宗教対話（高松）